

●実録 クルマ旅九泊十日 人々の営みあるところ、みな楽し

七尾和晃さんに、古道取材(?)の行程を日記ふうにつづってもらった。氏の取材には多分に「趣味と遊び」が盛り込まれているが、それがまた新たなテーマにつながる。飽くなき好奇心と探求心、そして遊び心——旅を面白くするのは、要は三つのココロである。

ルポライター

七尾和晃

●ななお・かずあき 1974年生まれ。国内外を精力的に取材し、日本と日本人の歩みを独特の視点で捉え直している。著書に『闇市の帝王』『銀座の怪人』『幻の街道』をゆく』など。

そうだ、金沢、行こう

新宿駅西口の地下街で立ち食い蕎麦を食べていたとき、カウンターのケースに押し込められたワカメを見て、不意に日本海の海が見たくなった。そうだ、金沢、行こう——。

明日は月曜日。高速道路の朝は混む。今夜中に高速道路に乗り、山梨

あたりのサービスエリアで寝たい。

日産セレナの後部座席を倒し、マットレスを敷き、羽毛布団と枕を放り込む。キャンプ用品の中から使えそうなものを物色する。釣り竿、川で泳ぐときのライフジャケット、登山用のロープなど。たとえ冷たくとも、せせらぎに必ず体を沈める流儀だけははしらない。水面目線で山を眺めるのは最高だ。川に下りるた

めにはロープが必要になる。

釣り用のクーラーボックス、カポーターティーと西村賢太の文庫本も放り込む。温泉に浸かって文庫を読むのが、幸せの瞬間だ。

金沢までのルートを頭で描く。夜に発つので、せつかくならば朝風呂に入りたい。カーナビの縮尺をいじりながら、ルートを描く。

中央道をとおりあえず長野・諏訪ま

で走り、そこで下りて、上高地方面に向かい、安房峠を越えよう。岐阜に入って、白骨温泉もいいが、せつかくだから野趣あふれる川のせせらぎを聞きながらの露天に入りたい。携帯電話からグーグルで複合検索すると、出た。岐阜・栃尾の「荒神の湯」だ。公営なので料金も安く、必ず駐車場もあるはずだ。

岐阜から金沢へ

勝沼インターを抜けたところの釈迦堂パーキングエリアで車中泊。停めるのはトラックの脇だ。朝日の日差しよけにもなるし、小型車のように頻繁に出入りもしない。

翌早朝、諏訪湖方面を目指す。一般道に出たところで、上高地方面にハンドルを切る。朝日に映える雪の残る八ヶ岳が美しい。

崖崩れが頻繁に起きる安房峠の直角カーブに、「ト伝の湯」の看板が見える。宮本武蔵に先立つ剣豪、塚原卜伝が傷を癒やしたと伝えられる湯だ。掘っ立て小屋の中に小さな湯があるのだろうか。一度は入ってみたい湯だが、まずは荒神の湯を目指す。

安房峠は崖崩れの巣で、えぐられて川に崩落したばかりの地肌が至るところに顔をのぞかせているのを確認して、国道ではなく、こぼばかりは有料のトンネルを使う。

維持費寄付金数百円を箱に落とし湯に入ると、ほま貸し切り。

川べりの露天風呂で一人、洗濯物を洗う男性がいる。

「あんた、どこからや。わしは大坂からで、もう二週間にもなるわ」「車中泊ですか?」

「ああ、でも、その駐車場はキャンプ禁止なのに、みんなキャンプしてて、もうすぐ禁止になる。そうしたらまたほかを探す」

「日本海を上がりますか? 太平洋に抜けますか?」

「ああ、秋田まで上がる。日本海、上がってく」

茂みからザザッと音がして夫婦と思しき男女二人が現れる。マムシに注意の看板を恐れぬつわものだ。ジヤージにTシャツ。散歩している地元風のいでたち。

「行ってきたんか?」

「ええ、川の下までずつと行って、そんで戻ってきましたよ。お腹空いちやったなあ」

川の向こうは日本の宇宙研究の拠点である神岡鉱山の跡地、カミオカンデがある。岐阜の山中は深い。湯船に浸かりながら、川向こうの